

# 課題別研修

## －いじめ防止パッケージ H27事例－

### いじめ事例（小学校）

1 A男（2年生）はのんびりとしたマイペースな児童である。小1の担任は、いろいろな児童と  
2 関わる中で活発になるのではないかと考え、小2のクラス替えの際に、これまでに仲が良かった子と別のクラスにした。

4 A男は授業の準備や片付けがいつも最後になっていた。担任のB教諭は「A男君、まだ用意  
5 ができてないよ。」「また、最後になりますよ。」「みんなに迷惑がかかるから、早くしよう。」な  
6 どと度々声をかけていた。周りの児童からも、「A男君、早くしよう。」「A男君、早く廊下に並  
7 ぶよ。」など、声がかかるようになった。A男も声をかけてもらおうと、ニコッとしながら、A男  
8 なりに早くしようと努力していた。

9 それでも基本的に行動がゆっくりなA男に、周りの児童の声かけはだんだんときつくなり、「早  
10 くしてよ。」「A男君が遅れるとみんなが怒られるだろ！」などといったA男を責める声かけが  
11 多くなった。B教諭は、「声をかけてあげるのはいいいけど、言い方がきつくならないように気を  
12 付けましょう。」と注意していた。しかし、何かにつけ行動が遅いA男を責める言動は多くなっ  
13 ていった。やがてA男の表情はだんだんと暗くなり、やる気が無さそうな様子になった。そし  
14 て、きつい声かけをされるとうまく対応できず、固まる場面が増えていき、A男が失敗すると、  
15 複数の児童からクスクスと笑い声が聞こえるようになった。B教諭は「人の失敗を笑ってはい  
16 けません。」とその度に注意はしたが、その後もA男の失敗を嘲笑することが続いた。

17 クラスへの指導はするものの、なかなかA男自身の行動も改善しないことから、B教諭はA  
18 男のことが心配になり、A男の状況とこれまでの経緯について学年主任に相談をした。話を聞  
19 いた学年主任は、翌日の放課後、生徒指導担当も加わった学年会を行うこととした。

20 学年会では、A男のこれまでの状況が報告され、今後の対応として、B教諭は、A男には朝  
21 一日の予定を予め伝え、移動がある時や着替えなどがある時に早めにそっと声をかけること、  
22 そして、少しでもできた時にはしっかりと褒めるように心がけることとした。さらに、他の児  
23 童がA男に対して少しでも良い声かけや良い関わりがあった際には、他の児童をしっかりと褒  
24 めることを確認した。

25 また、学年主任は他のクラスにも人の失敗を嘲笑する雰囲気があることをあげ、学年として  
26 人間関係づくりに取り組むことを提案した。

27

28 B教諭は次の日から、朝、A男に一日の予定を伝え、「今日の時間割黒板」に「着替え」「移  
29 動」などの印を付け、そのことをクラス全体に知らせるとともに、A男には早めにそっと声を  
30 かけるようにした。そして、A男が少しでもうまくできたり、周りの児童が少しでも良い関わり  
31 をA男にしたりした時には褒めることを心がけた。他の教諭も学年で行動する時や廊下など  
32 で、A男の様子を気かけ、声かけをし、周りの児童の様子も注意深く見るようになった。

33 しばらくするとA男は、前のようにニコッとすることが増えた。そして、A男が遅れても、  
34 きつい言い方をする児童がほとんど居なくなった。

# 課題別研修

## ーいじめ防止パッケージ H27事例ー

### いじめ事例（中学校）

1 A男（2年生）は、勉強はできる方ではなかったが、男女を問わず誰とでも話をすることができ、時にはおどけたしぐさでクラスメートを楽しませる存在だった。夏休み前になり、  
2 クラスが打ち解けた雰囲気になると、時にA男に面白いことをするように求める声が上ががり、  
3 その度にA男はおどけて見せてクラスメートの笑いを誘っていた。ある日の給食の準備中、  
4 A男がおどけて見せた時に、みんながそれを見て喜んでいの中で、「やれって言ったら、何でもやるアホなやつじゃ。」という声が聞こえた。給食指導をしていた担任は、A男の周りに居  
5 た生徒を集め、誰が言ったか問い詰めたが、誰も何も言わなかった。

6 夏休みが終わり、2学期になると、A男に面白いことをするように求める声が度々聞かれるようになり、その度にA男はおどけて見せていたが、表情はさえないかった。担任はその様子を見て、止めるようにクラスで何度か話をした。

11  
12 ある日の朝、担任は司書から、「昨日の放課後、図書室で同級生や上級生が数名、A男を取り囲み、A男のおどけた姿を見ながら笑っていた。A男がいじめられているように見えたので、止めるように言った。」という報告を受けた。

15  
16 担任と司書の話聞いていた学年主任は、学年団の教員を集め、状況を説明し、A男についての情報を共有した。そして、まずは担任にA男から話を聞くように指示した。

17 担任は、朝の会の後A男を呼び、先生たちが心配していることを伝え、昨日のことについて尋ねた。するとA男は、これまでも何度か同じクラスのB男に呼び出されたことがあり、  
18 B男が連れてきた上級生の前で、見世物のようになっていること、これまで我慢して辛かったことを話した。担任はA男の気持ちに寄り添い、今後は辛い思いをさせないことを約束した。

22  
23 担任が学年主任と生徒指導主事に報告すると、生徒指導主事はA男への支援、B男への指導、学級全体への指導を行う必要があることを述べ、管理職の了解を取った上で、学年主任を中心に、担任が指導・支援に当たることを指示した。

26 担任は学年主任と相談し、すぐにB男を呼び、事情を確認した上で、A男の気持ちを伝え、指導した。B男はことの重大さに気づき、「A男に謝りたい。」と言ったため、担任はA男にその旨を伝え、場を設けた。B男は面白半分でしていたことを謝罪し、今後二度としないことを約束した。A男は、B男と約束できたことを喜んでいたが、学級での他の生徒からの視線を気にしていた。しかし、担任が直接、学級でA男について話をすることは拒否した。その日の夕方、担任はA男、B男の保護者に電話で事情を説明した。

32 翌日の学級活動の時間に、担任はあえてA男のことには触れずに、他者理解が進むよう本音が出し合える場を設定し、互いを大切にすることを話した上で、間近に迫った文化祭に向けて学級全体で取り組むよう話した。A男の表情は、最初はこわばっていたが、クラスメートと話をすることで、徐々に表情が緩んでいった。さらに、A男に優しく声をかけるB男の姿があり、担任は胸をなで下ろした。

# 課題別研修

## －いじめ防止パッケージ H27事例－

### いじめ事例（高等学校）

1 A子（1年生）は、いつも休憩時間には、B子を含む4、5人の友達と一緒に過ごしていた。  
2 しかし、1学期の終わりになると一人で本を読んだり、勉強をしたりして休憩時間を過ごすこ  
3 とが多くなった。担任は気になってA子に「最近困ったことはないか。」と尋ねると、A子は「特  
4 に、困ったことはありません。成績が落ちてきたので勉強を頑張っていないといけないと思っ  
5 ています。」と答えた。担任は、しばらく様子を見ることにした。9月に行われた文化祭では、  
6 A子は実行委員として役割を果たしていたので担任は安心していた。

7 10月の初めにA子の教科書がなくなり、ゴミ箱から発見された。A子は「大きな事件にし  
8 たくない。」と言ったが、担任は心配だったので、現在A子が親しくしていた友達に「A子の様  
9 子が心配なので声をかけてあげて欲しい。」と伝えた。その後、A子の自転車の空気が抜かれた  
10 り、校舎の壁にA子の悪口が書かれたりといったずらがエスカレートしていった。以前、A子と  
11 親しかったB子を含めた4人がA子の鞆を勝手に触っていたという目撃情報があり、担任が彼  
12 女たちに問いただすと今までのA子に対する嫌がらせを認めた。担任は、すぐに学年主任と生  
13 徒指導主事に報告した。

14

15 その後、いじめ対策委員会が開かれ、その中で、以下の点について留意して対応することを  
16 確認した。

- 17 ① 事実確認を被害生徒と加害生徒の双方から行い、その内容を共通理解した上で対応する。  
18 ② 被害生徒やその保護者がどのような解決方法を望んでいるのかを確認する。また、加害生徒  
19 については、なぜそのような行為に至ったのかを検証するとともに、その行為がなぜ許され  
20 ないのかを保護者と連携し十分に指導する。  
21 ③ 関係生徒の学年教職員、養護教諭、教育相談担当、部活動顧問等からなる対応チームを立ち  
22 上げ、その解消まで連携を密にしながら指導、支援を進める。担任や一部の教職員任せにす  
23 ることなく、被害生徒が安心して登校できる学校の体制を全教職員が協力して築く。

24

25 A子から事実関係の確認を行うとともに、養護教諭、教育相談担当が中心となってA子の心  
26 情を聞き取り、心のケアを図った。

27 また、担任と学年主任は家庭訪問を行い、保護者へ事情を伝え、今後の対応について情報を  
28 共有することを確認した。

29 加害生徒たちは、「A子が他の生徒たちにB子の悪口を言っていたから仕返しをした。」と話  
30 した。担任等からA子の思いをしっかりと伝え、「君たちが行っている行為はいじめであり、いじ  
31 めは絶対にしてはいけないことだ。」と強く加害生徒の認識を変えるための指導を行った。担任  
32 からそれぞれの保護者へ事実を連絡し、学校と保護者が連携して以後の対応を行えるように協  
33 力を求めた。

34 また、休憩時間や登下校時に再びトラブルが発生することも予測されたので、休憩時間中の  
35 教職員による校内巡視を強化したり、登下校時の校外巡視を実施したりして、教職員が絶えず  
36 当該生徒を見守ることができる状況をつくった。その後、担任の粘り強い指導により、いじめ  
37 を行った加害生徒は指導に従い、自らの行為がA子の心を傷付けていたことに気付き、A子に  
38 謝罪できるようになった。

# 課題別研修

## ーネットいじめ防止パッケージ H27事例ー

### ネットいじめ事例（小学校）

○以下の語は（ ）内を意味する  
スマホ（スマートフォン）  
SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）  
アプリ（アプリケーションソフト）  
ネット（インターネット）

- 1 素直で優しく成績の良いA子（5年生）は、周りから一目置かれる友達の多い女兒である。
- 2 ある日、塾の日の連絡用に所持しているスマホのSNSアプリで利用している学級グループ
- 3 にB子から「宿題の漢字2ページもめんど〜い！ 1ページでや〜めた！」という書き込みがあ
- 4 った。この書き込みには次々と“読済”の人数が増えていったが、誰もこの話題についてコメ
- 5 ントを返さず、話が広がることはなかった（「読済」の人数とは、グループに所属している人のうち何人のメンバーが読ん
- 6 だかが分かる機能のこと）。A子も「B子の気持ち分かる！」くらいで軽く受け流し、頑張っ
- 7 て漢字2ページの宿題を終わらせた。
- 8 次の日、学級グループのメンバーが先生に呼び出されたことでA子は驚くべき事実を知った。
- 9 A子以外の学級グループに入っている児童は、みんな漢字を1ページしかせず提出していたの
- 10 だ。A子は「何か変だなあ。」と思いながらも、帰宅して学級グループに「めんどくさいけど漢
- 11 字練習頑張ろうよ(^\_^)v」とコメントをした。瞬く間に“読済”の人数が増えていったが、こ
- 12 の書き込みへの返信は全くなく、A子は不安を感じ始めた。
- 13 翌日から学級グループのメンバーが明らかにA子を避けるようになり、話しかけても「ふ〜
- 14 ん。」くらいの冷めた返事が返る程度だった。具体的に何をされるわけでもないのだが、A子は
- 15 完全に孤立状態に陥った。A子は不安を抱えながらも登校を続けていたが、娘の異変を感じ取
- 16 った母親がA子から事情を聞き、担任に電話で相談をした。担任は相談内容を学年主任と生徒
- 17 指導担当に伝え、学年主任と家庭訪問した。家庭訪問では、A子から学校での様子を聞き取り、
- 18 SNSのやりとりを保存し、証拠として残した。その際、担任は心に訴える指導を続け、集団
- 19 の無視がなくなることを中心とした対応をし、いじめ解消へ向けて支援していく決意で、A子
- 20 と母親に「嫌がらせは、許せない行為である。」「A子を必ず守る。」と伝えた。その間、生徒指
- 21 導担当は生徒指導委員会において、これまでの経緯と、二人の教員の動きを管理職に報告した。
- 22 生徒指導委員会としては、この件を「いじめ」と捉えて速やかに対処していくことにし、生徒
- 23 指導担当をチーフに援助チームをつくり役割を明確化した。
- 24 次の日、担任はA子と母親の承諾を得て、嫌がらせの事実をクラス全員に伝え、情報収集の
- 25 ためのアンケート調査を実施した。また、休み時間を利用して教育相談等を実施するなど、ク
- 26 ラスの児童が過度に不安にならないよう心のケアに当たるとともに、情報収集に努めた。集ま
- 27 った情報はクラスの間関係の実態等と併せて生徒指導委員会や職員会議で報告し、全職員で
- 28 共有した。そして、今後の支援や指導方針を確認した。
- 29 その後、一人ずつ丁寧に話を聞き、指導を始めたが状況は良くならなかった。初めに書き込
- 30 みをしたB子へ個別指導しても、「みんなを誘ったつもりはない。」「誰からもコメントはなかつ
- 31 たし、A子が無視しようとも書き込んでいない。」などと反発し、学級グループに所属している
- 32 児童も同様の反応で、状況は膠着した。援助チームはこれまでの指導を見直し、個別指導の継
- 33 続とともに集団への指導を強化することを確認した。A子と母親にも指導状況の説明と今後、
- 34 全体指導を強化する方針について承諾を得た。
- 35 翌日、学年の児童全員を体育館に集め、生徒指導担当から嫌がらせの事実を伝え、「嫌がらせ
- 36 は許せない卑劣な行為である。」「いじめは絶対に許されない。」ことを指導した。また、学級活
- 37 動で、嫌がらせをする側の心理、される側の心理を考えさせるロールプレイングや、信頼や友
- 38 情の大切さに気付かせる道徳の授業を実施した。さらに、学年通信等で指導の状況を保護者に
- 39 伝え、家庭でもいじめやスマホの扱いについて話をしてもらえようようお願いをした。
- 40 その後、A子の支援をきめ細かく継続していく中で、A子を支えてくれる友達が徐々に増え
- 41 ていき、A子への無視は突如としてなくなった。

# 課題別研修

## ーネットいじめ防止パッケージ H27事例ー

### ネットいじめ事例（中学校）

○以下の語は（ ）内を意味する  
スマホ（スマートフォン）  
SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）  
アプリ（アプリケーションソフト）  
ネット（インターネット）

1 A子（1年生）は入学してから同じクラスのB、C、Dと仲良くなった。その3人はスマホのS  
2 NSアプリでグループをつくり連絡をとっていた。A子もその仲間に入りたいと思い、親にねだり  
3 スマホを買ってもらい、それからはA子も同じグループに登録し、SNSでやりとりをするように  
4 になった。

5 6月のある日、A子は部活動を終えて帰宅し、SNSのB、C、Dとのグループにクラスの出来  
6 事が書き込まれているコメントを読んだが、急ぐほどのことではないと思い、すぐにコメントしな  
7 かった。その後、入浴を済ませると疲れていたA子はつい寝てしまった。朝方、目覚めてSNSを  
8 見ると、B、C、Dから「何してる？」「どうしたの？」など、メッセージが入っていた。A子は慌  
9 ててコメントをしようとしたが、直接会って謝った方が良いと思い、いつもより早く登校した。B、  
10 C、Dにそれぞれ「昨日はごめん、疲れて寝てた。」と謝ったが、「そうなの。」「ふーん。」と冷たい  
11 返事が返ってくるだけだった。その日、同じクラスで同じ部活のF美から「A子の知らないSNS  
12 グループで、B、C、Dが『A子は自分勝手。』『むかつく。』など書き込んでいた。」と聞かされた。  
13 クラスにはすでに仲良しグループができていたため、A子は他のグループに入れず、その日から一  
14 人で過ごすようになった。

15 この出来事があってからは、A子は体調不良を訴えて保健室へ行くことが多くなった。養護教諭  
16 はA子の暗い表情を見て、何かあったのか尋ねた。A子はこれまでのことと、最近はB、C、Dと  
17 すれ違う時に「うざい。」「きもい。」など言われるようになったことを話し、「教室に行きたくない。」  
18 と訴えた。養護教諭はA子に、担任のE教諭へも話すように勧め、養護教諭自身もE教諭にA子の  
19 ことを伝えた。E教諭もA子の様子が気になっており、話をしたいと思っていた。A子から話を聞  
20 いたE教諭は、B、C、Dに指導する旨をA子に伝えたが、「よけいにひどくなるから、やめて！」  
21 と強い口調で返事が返ってきた。その日、もともと風邪気味だったA子は、体調不良を理由に早退  
22 した。

23 E教諭はすぐに学年主任と生徒指導主事にA子のことを報告した。学年主任は放課後、緊急の学  
24 年会議を開き、B、C、Dへの指導を提案したが、E教諭の話を聞き、まずはA子が安心して登校  
25 できる環境を整えることで、学校を休まなくても良い方法をA子に提案することになった。どうし  
26 ても教室に居辛い場合は保健室で休養しても良いこととし、E教諭を中心に教室でB、C、D以外  
27 で一緒に過ごせる友達がいないか探すこととなった。

28 その日、E教諭は家庭訪問し、A子と母親に状況と対応について説明をした。そしてA子に「一  
29 緒に居てくれそうなクラスメートが居ない？」と尋ねると、F美の名前があがった。F美は心配し  
30 て先ほど電話をくれたとのことだった。母親はとても心配をして、学校でよく様子を見て欲しいと  
31 言い、E教諭は了承した。

32 翌日、A子はF美の励ましを受け、学校に登校し、F美らと一緒に過ごした。まだ表情は硬く、  
33 4時間目は保健室で休養した。その後、徐々にB、C、Dに何か言われることもなくなり、教室で  
34 F美らと過ごせるようになった。

35 後日、学年全体でもネット上のトラブルが増えているので、情報モラルに関する学年集会や学級  
36 活動を行うことになった。学年で情報モラルに関する講演会が開かれ、それを受けて学級活動でも  
37 話し合いを行った。生徒からは「SNSを自分からやめにくい。」「“読済スルー（コメントを読んでも返信  
38 のコメントしないこと）”しないように気を遣っている。」など困っている状況が発表された。B、C、  
39 Dも始めはばつの悪そうな顔をしていたが、それぞれの班で「扱いに困っている。」「SNSの中だ  
40 と、つい調子にのってしまう。」など、素直に話ができていた。E教諭は熱心に話に参加しているA  
41 子の様子を見て安心するとともに、改めてネット上のトラブルに対する指導の必要性を感じた。

## 課題別研修

### ーネットいじめ防止パッケージ H27事例ー

#### ネットいじめ事例（高等学校）

○以下の語は（ ）内を意味する  
スマホ（スマートフォン）  
SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）  
アプリ（アプリケーションソフト）  
ネット（インターネット）  
HR（ホームルーム）

1 A子（1年生）は入学してから同じクラスのB、C、Dと仲良くなった。4人はSNSでグ  
2 ループをつくり、毎日連絡をとっていた。ある日、A子は部活動を終えて帰宅し、SNSのB、  
3 C、Dとのグループにクラスの出来事が書き込まれているコメントを読んだが、急ぐほどのこと  
4 ではないと思い、コメントをしないまま入浴をすませると、疲れて寝てしまった。次の日の朝、  
5 SNSを見るとB、C、Dから「何してる?」「どうしたの?」など、何通ものメッセージが入  
6 っていた。A子は慌ててコメントしようとしたが、直接会って謝った方が良いと思い、いつも  
7 より早く登校した。B、C、Dにそれぞれ「昨日はごめん、疲れて寝てた。」と謝ったが、「そ  
8 うなの。」「ふーん。」と冷たくあしらわれた。その後A子は話しかけても相手にされず無視され  
9 るようになった。

10 後日、同じクラスで同じ部活のF美から「A子の知らないSNSグループでB、C、Dが『A  
11 子は自分勝手。』『むかつく。』」など書き込んでいた。」と聞かされた。クラスにはすでに仲良し  
12 グループができており、不安を抱えたA子は他のグループからも無視されているかもしれない  
13 と思い込むようになり、学校では一人で過ごすようになった。担任のE教諭はそんな様子のA  
14 子に気づき、昼休みに教室で、「どうした?何かあった?」と声をかけたが、A子は「別に何で  
15 もないです。」と言ってその場を立ち去った。

16 その後、日を追うごとにA子の表情は暗くなり、欠席が増えるようになった。E教諭が家庭  
17 訪問し、母親とともにA子に話を聞いたところ、A子はぼつりぼつりとこれまでのことを話し  
18 始めた。最近B、C、Dとすれ違う時に「うざい。」「きもい。」など言われるようになったと  
19 も話した。E教諭がA子にB、C、Dに指導する旨を確認すると、「よけいにひどくなるから、  
20 何もしないで!」と強く拒んだ。母親はとても心配をしたが、E教諭は「学校で対応を協議し  
21 て、後ほどお電話いたします。」と伝え、と、「よろしくお願いします。」と学校の対応に任せる  
22 ことを了承した。

23 E教諭は学校に戻り、学年主任と生徒課長に報告し、急遽、学年会議を開くことになった。  
24 学年主任はB、C、Dへの指導を提案したが、E教諭の話を聞き、まずはA子が安心して登校  
25 できる環境を整えることで、学校を休まなくても良い方法をA子に提案することに決まった。  
26 どうしても教室に居辛い場合は保健室で休養しても良いこととし、E教諭を中心に学校で一緒  
27 に過ごせる友達がいらないかA子に尋ねることになった。

28 E教諭はA子に電話し、「一緒に過ごせる友達がいらないかな?」と尋ねると、同じ部活動をし  
29 ているF美の名前があがった。F美はA子が欠席していることを心配して電話をしてくれて  
30 いるとのことだった。E教諭は、母親にもA子の気持ちと今後の対応について説明をした。

31 翌日、A子はF美の励ましを受け学校に登校し、F美らと一緒に過ごすことができていた。  
32 まだ表情は硬く、4時間目は保健室で休養したが、その後、徐々にB、C、Dに何か言われる  
33 こともなくなり、教室でF美らと過ごせるようになった。

34 後日、学年全体でもネット上のトラブルが増えているので、情報モラルに関する学年集会や  
35 HR活動を行うことになった。学年で情報モラルに関する講演会が開かれ、それを受けてHR  
36 活動でも話し合いを行った。生徒からは「SNSを自分からやめにくい。」「読済スルー（コメント  
37 を読んでも返信のコメントしないこと）」しないように気を遣っている。」など困っている状況が発表さ  
38 れた。B、C、Dも始めはばつの悪そうな顔をしていたが、それぞれの班で「扱いに困ってい  
39 る。」「SNSの中だと、つい調子にのってしまう。」など、素直に話ができていた。E教諭は熱  
40 心に話に参加しているA子の様子を見て安心するとともに、改めてネット上のトラブルに対す  
41 る指導の必要性を感じた。